

# 学校いじめ防止基本方針

岸和田市立八木北小学校  
平成 27 年 3 月 31 日

# 目 次

<b>第 1 章 いじめ防止に関する本校の考え方</b> .....	1
1 基本理念	
2 いじめの定義	
3 いじめ防止のための組織	
4 取組状況の把握と検証（PDCA）	
5 年間計画	
<b>第 2 章 いじめ防止</b> .....	4
1 基本的な考え方	
2 いじめの防止のための措置	
<b>第 3 章 早期発見</b> .....	6
1 基本的な考え方	
2 いじめ早期発見のための措置	
<b>第 4 章 いじめに対する迅速な対応</b> .....	7
1 基本的な考え方	
2 いじめ発見・通報を受けたときの対応	
3 いじめられた児童又はその保護者への対応	
4 いじめた児童への指導又はその保護者への助言	
5 いじめが起きた集団への働きかけ	
6 ネット上のいじめへの対応	
7 重大事態への対応	
<b>第 5 章 その他</b> .....	10

## 第1章 いじめ防止に関する本校の考え方

### 1 基本理念

いじめは、その子どもの将来にわたって内面を深く傷つけるものであり、子どもの健全な成長に影響を及ぼす、まさに人権に関わる重大な問題である。全教職員が、いじめはもちろん、いじめをはやし立てたり、傍観したりする行為も絶対に許さない姿勢で、どんな些細なことでも必ず親身になって相談に応じることが大切である。そのことが、いじめ事象の発生・深刻化を防ぎ、いじめを許さない児童の意識を育成することになる。

そのためには、学校として教育活動の全てにおいて生命や人権を大切にする精神を貫くことや、教職員自身が、児童を一人ひとり多様な個性を持つかけがえのない存在として尊重し、児童の人格のすこやかな発達を支援するという児童観、指導観に立ち指導を徹底することが重要となる。

本校では、「たくましく生き生きした子を育てる」を教育目標としており、そのために人権教育に重点をおいて取り組んでいる。いじめは重大な人権侵害事象であるという認識のもとに、ここに学校いじめ防止基本方針を定める。

### 2 いじめの定義

「いじめ」とは、児童等に対して、当該児童等が在籍する学校に在籍している等当該児童等と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為（インターネットを通じて行われるものを含む。）であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているものをいう。

具体的ないじめの態様は、以下のようなものがある。

- 冷やかしかからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる
- 仲間はずれ、集団による無視をされる
- 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩かれたり、蹴られたりする
- ひどくぶつかられたり、叩かれたり、蹴られたりする
- 金品をたかられる
- 金品を隠されたり、盗まれたり、壊されたり、捨てられたりする
- 嫌なことや恥ずかしいこと、危険なことをされたり、させられたりする
- パソコンや携帯電話等で、誹謗中傷や嫌なことをされる 等

### 3 いじめ防止のための組織

(1) 名称

「いじめ、虐待、不登校問題対策委員会」

(2) 構成員

校長、教頭、首席、生活指導担当者、各学年主任、養護教諭、  
必要に応じて外部専門家(スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー等)

(3) 役割

- ア 学校いじめ防止基本方針の策定
- イ いじめの未然防止
- ウ いじめの対応
- エ 教職員の資質向上のための校内研修
- オ 年間計画の企画と実施
- カ 年間計画進捗のチェック
- キ 各取組の有効性の検証
- ク 学校いじめ防止基本方針の見直し

### 4 取組状況の把握と検証（PDCA）

いじめ、虐待、不登校問題対策委員会は、年4回、（検討会議を）開催し、取組みが計画どおりに進んでいるか、いじめの対処がうまくいかなかったケースの検証、必要に応じた学校基本方針や計画の見直しなどを行う。

## 5 年間計画

本基本方針に沿って、以下のとおり実施する。

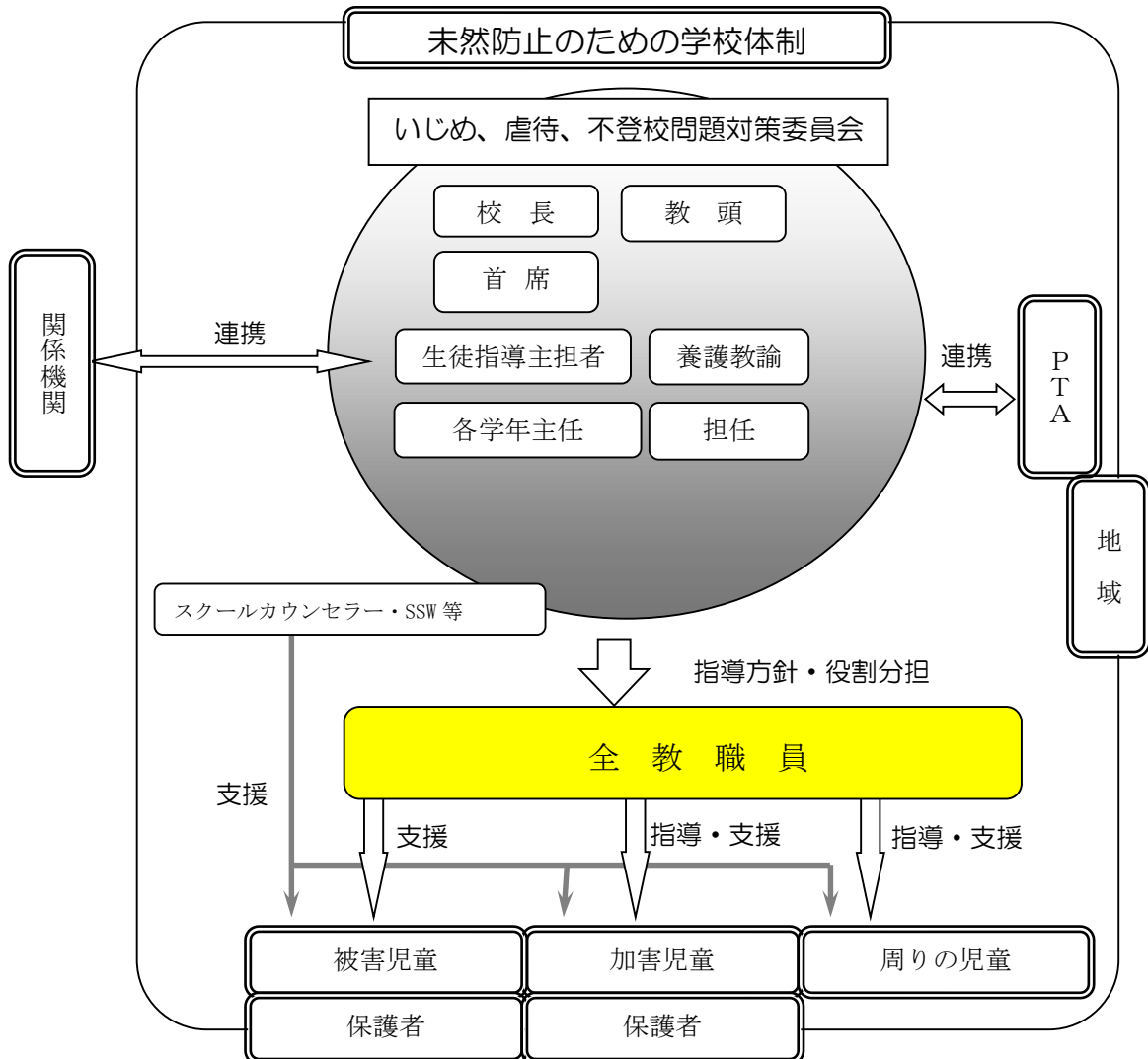
岸和田市立八木北小学校 いじめ防止年間計画				
	低学年	中学年	高学年	学校全体
4月	入学式・始業式 保護者への相談窓口周知 児童への相談窓口周知 環境カードにより把握された児童状況の集約	始業式 保護者への相談窓口周知 児童への相談窓口周知 環境カードにより把握された児童状況の集約	始業式 保護者への相談窓口周知 児童への相談窓口周知 環境カードにより把握された児童状況の集約	第1回 いじめ、虐待、不登校問題対策委員会（年間計画の確認、問題行動調査結果を共有）
5月	家庭訪問による家庭状況把握 校外学習（集団づくり）	家庭訪問による家庭状況把握 校外学習（集団づくり）	家庭訪問による家庭状況把握 校外学習（集団づくり）	PTA総会で「学校いじめ防止基本方針」の趣旨説明
6月	生活指導全体会	生活指導全体会	生活指導全体会	生活指導全体会
7月	子ども祭り（集団づくり） 生活アンケートの実施 保護者懇談会（家庭での様子の把握）	子ども祭り（集団づくり） 生活アンケートの実施 保護者懇談会（家庭での様子の把握）	子ども祭り（集団づくり） 生活アンケートの実施 保護者懇談会（家庭での様子の把握）	アンケート確認 第2回いじめ、虐待、不登校問題対策委員会（進捗確認）
9月			臨海学校（集団づくり）	
10月	運動会	運動会	運動会	
11月	人権参観、ふれあい祭り 生活アンケートの実施	人権参観、ふれあい祭り 生活アンケートの実施	人権参観、ふれあい祭り 生活アンケートの実施	アンケート確認
12月	校内音楽会（集団づくり） 保護者懇談会（家庭での様子の把握）	校内音楽会（集団づくり） 保護者懇談会（家庭での様子の把握）	校内音楽会（集団づくり） 保護者懇談会（家庭での様子の把握）	第3回委員会（状況報告と取組みの検証）
1月	情報モラル学習（児童・保護者向け）	情報モラル学習（児童・保護者向け）	情報モラル学習（児童・保護者向け）	アンケート確認
2月	生活アンケートの実施 生活指導全体会	生活アンケートの実施 生活指導全体会	生活アンケートの実施 生活指導全体会	第4回委員会（年間の取組みの検証）
3月	終業式	終業式	終業式・卒業式	

## 第2章 いじめ防止

### 1 基本的な考え方

いじめの未然防止にあたっては、教育・学習の場である学校・学級自体が、人権尊重が徹底し、人権尊重の精神がみなぎっている環境であることが求められる。そのことを基盤として、人権に関する知的理解及び人権感覚を育む学習活動を各教科、(道徳)、特別活動、総合的な学習の時間のそれぞれの特質に応じ、総合的に推進する必要がある。

特に、児童生徒が、他者の痛みや感情を共感的に受容するための想像力や感受性を身につけ、対等で豊かな人間関係を築くための具体的なプログラムを作成する必要がある。そして、その取組みの中で、当事者同士の信頼ある人間関係づくりや人権を尊重した集団としての質を高めていくことが必要である。



## 2 いじめの防止のための措置

- (1) 平素からいじめについての共通理解を図るため、教職員に対しては、生徒の様子を常日頃から観察し、教師間の活発な情報や意見の交換を行い、学級間、学年間そして学校全体でいじめ防止のための一致協力し取り組む。

児童に対しては、いじめについて自身の問題として考えさせ加害者にも被害者にもならないための人権学習をそれぞれの学年(発達段階)に応じてふさわしいテーマで実施する。また、日常的にいじめ問題を学級会や終わりの会等で話題にするなど、身近な問題として関心を持たせる。

- (2) いじめに向かわない態度・能力を育成するために、自他の存在を認め合い、尊重し合える態度を養うことや、児童が円滑に他者とコミュニケーションを図る能力を育てることが必要である。そのために、児童の健康・生活・学習上の問題をとらえ、そこから出てくる課題を教育実践の中心にすえ、児童が、自分の人生の主人公になれるよう配慮して、すべての教育活動をすすめる。

- (3) いじめが生まれる背景を踏まえ、指導上の注意としては、すべての児童がいじめに巻き込まれる可能性があるものとして、全員を対象に未然防止の取組を行う。友人関係や勉強にまつわる嫌なできごとが児童にストレスをもたらすことがあるので、授業が児童のストレスサーになっていないか、授業中に児童の不安や不満が高められていないかを意識し、わかる授業づくりを進める。

分かりやすい授業づくりを進めるために、すべての児童が参加・活躍できる授業を工夫する。児童が授業に参加できる、授業場面で活躍できるための授業改善であれば、学力向上にはもちろん、いじめを始めとした生活指導上の諸問題の未然防止にもつながる。

児童一人一人が活躍できる集団づくりを進めるために、ひとり一人の個性が認められ、安心して個性を出せる集団づくり(居場所づくりや絆づくり)を進めていく。互いを認め合える人間関係・学校風土を児童自らがつくりだしていけるよう支援を行う。

ストレスに適切に対処できる力を育むために、他者の尊重や他者への感謝の気持ちを高めることによってストレスをコントロールできるような友人関係・集団づくり、社会性の育成などを取り組む。

「いじめられる側にも問題がある」かのように受け止められかねない認識や言動を示し、いじめている児童や、まわりで見えていたり、はやし立てたりしている児童を容認するなど、いじめを助長するような教職員の不適切な認識や言動等、指導の在り方に注意を払うため、校内研修などを通して児童についての理解を深める。

- (4) 自己有用感や自己肯定感を育む取組みとして、児童同士や大人との関わり合いを通して、児童自らが人と関わることの喜びや大切さに気づいていくこと、互いに関わりあいながら絆づくりを進め、他人の役に立っている、他人から認められているといった自己有用感を獲得していくことができるような機会をつくる。

- (5) 児童が自らいじめについて学び、取り組む方法として、人権学習を始め学校生活のあらゆる場面において、児童自身が、いじめの問題を自分たちの問題として受け止め、自分たちでできることを主体的に考えて行動できるように、教職員が助言するとともに、それを支援することが大切である。

## 第3章 早期発見

### 1 基本的な考え方

いじめの特性として、いじめにあっている児童がいじめを認めることを恥ずかしいと考えたり、いじめの拡大を恐れるあまり訴えることができないことが多い。また、自分の思いをうまく伝えたり、訴えることが難しいなどの状況にある児童が、いじめにあっている場合は、隠匿性が高くなり、いじめが長期化、深刻化することがある。

それゆえ、教職員には、何気ない言動の中に心の訴えを感じ取る鋭い感性、隠れているいじめの構図に気づく深い洞察力、よりよい集団にしていこうとする熱い行動力が求められている。

### 2 いじめの早期発見のための措置

- (1) 実態把握の方法として、定期的なアンケートをとり実態把握をすることはもちろん、普段から授業中や教室、保健室での様子、児童の教職員への相談等から、①児童のささいな変化に気づくこと、②気づいた情報を確実に共有すること、③(情報に基づき)速やかに対応すること、が必要である。児童の変化に気づかずにいじめを見過ごしたり、せっかくながら見逃したり、相談を受けながら対応を先延ばしにしたりすることは、絶対に避けなければならない。

定期的な教育相談としては、スクールカウンセラーによる教育相談やケース会議を積極的に活用し、いじめ、虐待、不登校問題対策委員会で情報を共有し、速やかに対応する。

日常の観察として、気になる変化が見られた、遊びやふざけなどのようにも見えるものの気になる行為があった等の場合、例えば5W1H(いつ、どこで、誰が、誰と、何を、どのように)を簡単にメモし、職員がいつでも共有できるようにする。そうして得られた目撃情報等を毎日集約し、必要に応じて関係者を招集し、その後の対応を考える体制をつくる。

- (2) 保護者と連携して児童を見守るため、保護者に協力してもらい、家庭で気になった様子はないかを把握する。積極的に保護者からの相談を受け入れる体制や、地域の方から通学時の様子を寄せてもらえる体制についても工夫する。
- (3) 児童、その保護者、教職員が、抵抗なくいじめに関して相談できる体制として、担任、学年、養護教諭、生活指導担当が相談窓口となり、日頃からの声かけをし、良好な人間関係を築いておくことが大切である。また、些細な情報であってもきちんと対応し、担任だけが抱え込まないようにすることが大切である。「いじめ相談ダイヤル」「教育相談室」



「子ども家庭センター」等の存在も周知する。

- (4) 保護者向けプリント、学校ホームページにより、相談体制を広く周知する。  
いじめ、虐待、不登校問題対策委員会により、適切に機能しているかなど、定期的に体制を点検する。
- (5) 教育相談等で得た児童の個人情報については、その対外的な取扱いについて、一方的、一面的な解釈で対処しないこと、プライバシーを守ること、迅速に保護者に連絡すること、教育的配慮のもとでのケアや指導を行うことなどに留意する。

## 第4章 いじめに対する迅速な対応

### 1 基本的な考え方

いじめにあった児童のケアが最も重要であるのは当然であるが、いじめ行為に及んだ児童の原因・背景を把握し指導に当たることが、再発防止に大切なことである。近年の事象を見ると、いじめた児童自身が深刻な課題を有している場合が多く、相手の痛みを感じたり、行為の悪質さを自覚することが困難な状況にある場合がある。よって、いじめた当事者が自分の行為の重大さを認識し、心から悔い、相手に謝罪する気持ちに至るような継続的な指導が必要である。いじめを受けた当事者は、仲間からの励ましや教職員や保護者等の支援、そして何より相手の自己変革する姿に、人間的信頼回復のきっかけをつかむことができると考える。

そのような、事象に関係した児童同士が、豊かな人間関係の再構築をする営みを通じて、事象の教訓化を行い教育課題へと高めることが大切である。

具体的な児童や保護者への対応については、(別添)「いじめ事象生起時の対応について(平成24年9月市教委作成)」「ネット上のトラブルへの対応(平成25年10月市教委作成)」を参考にして、外部機関とも連携する。

### 2 いじめ発見・通報を受けたときの対応

- (1) いじめの疑いがある場合、ささいな兆候であっても、いじめの疑いがある行為には、早い段階から的確に関わる。  
遊びや悪ふざけなど、いじめと疑われる行為を発見した場合、その場でその行為を止めたり、児童や保護者から「いじめではないか」との相談や訴えがあった場合には、真摯に傾聴する。  
その際、いじめられた児童やいじめを知らせてきた児童の安全を確保するよう配慮する。
- (2) 教職員は一人で抱え込まず、速やかに学年主任や分掌長等に報告し、いじめの防止等の対策のための組織(いじめ対策委員会)と情報を共有する。その後は、当該組織が中心となって、速やかに関係児童から事情を聴き取るなどして、いじめの事実の有無の確認を行う。

- (3) 事実確認の結果、いじめが認知された場合、管理職が市教委に報告し、相談する。
- (4) 被害・加害の保護者への連絡については、家庭訪問等により直接会って、より丁寧に行う。
- (5) いじめが犯罪行為として取り扱われるべきものと認められるときは、いじめられている児童を徹底して守り通すという観点から、所轄警察署と相談し、対応方針を検討する。なお、児童の生命、身体又は財産に重大な被害が生じるおそれがあるときは、直ちに所轄警察署に通報し、適切に援助を求める。

### 3 いじめられた児童生徒又はその保護者への支援

- (1) いじめた児童の別室指導や出席停止などにより、いじめられた児童が落ち着いて教育を受けられる環境を確保し、いじめられた児童に寄り添い支える体制をつくる。その際、いじめられた児童にとって信頼できる人（親しい友人や教職員、家族、地域の人等）と連携し、いじめ対策委員会が中心となって対応する。状況に応じて、スクールカウンセラーの協力を得て対応を行う。

### 4 いじめた児童生徒への指導又はその保護者への助言

- (1) 速やかにいじめを止めさせた上で、いじめたとされる児童からも事実関係の聴取を行う。  
いじめに関わったとされる児童からの聴取にあたっては、個別に行うなどの配慮をする。
- (2) 事実関係を聴取した後は、迅速にいじめた児童の保護者と連携し、協力を求めるとともに、継続的な助言を行う。
- (3) いじめた児童への指導に当たっては、いじめは人格を傷つけ、生命、身体又は財産を脅かす行為であることを理解させ、自らの行為の責任を自覚させる。なお、いじめた児童が抱える問題など、いじめの背景にも目を向け、当該児童の安心・安全、健全な人格の発達に配慮する。  
その指導にあたり、学校は、複数の教職員が連携し、必要に応じてスクールカウンセラーの協力を得て、組織的に、いじめをやめさせ、その再発を防止する措置をとる。

### 5 いじめが起きた集団への働きかけ

- (1) いじめを見ていたり、同調していたりした児童に対しても、自分の問題として捉えさせる。  
そのため、まず、いじめに関わった児童に対しては、正確に事実を確認するとともに、いじめを受けた者の立場になって、そのつらさや悔しさについて考えさせ、相手の心の悩みへの共感性を育てることを通じて、行動の変容につなげる。  
また、同調していたりはやし立てたりしていた「観衆」、見て見ぬふりをしていた

「傍観者」として行動していた児童に対しても、そうした行為がいじめを受けている児童にとっては、いじめによる苦痛だけでなく、孤独感・孤立感を強める存在であることを理解させるようにする。

「観衆」や「傍観者」の児童は、いつ自分が被害を受けるかもしれないという不安を持っていることが考えられることから、すべての教職員が「いじめは絶対に許さない」「いじめを見聞きしたら、必ず先生に知らせることがいじめをなくすことにつながる」ということを児童に徹底して伝える。

- (2) いじめが認知された際、被害・加害の児童たちだけの問題とせず、学校の課題として解決を図る。全ての児童が、互いを尊重し、認め合う集団づくりを進めるため、担任が中心となって児童一人ひとりの大切さを自覚して学級経営するとともに、すべての教職員が支援し、児童が他者と関わる中で、自らのよさを発揮しながら学校生活を安心してすごせるよう努める。

そのため、認知されたいじめ事象について地域や家庭等の背景を理解し、学校における人権教育の課題とつなげることにより教訓化するとともに、いじめに関わった児童の指導を通して、その背景や課題を分析し、これまでの児童への対応のあり方を見直す。その上で、人権尊重の観点に立ち、授業や学級活動を活用し、児童のエンパワメントを図る。その際、スクールカウンセラーとも連携する。

運動会や文化祭、校外学習等は児童が、人間関係づくりを学ぶ絶好の機会ととらえ、児童が、意見が異なる他者とも良好な人間関係を作っていくことができるよう適切に支援する。

## 6 ネット上のいじめへの対応

- (1) ネット上の不適切な書き込み等があった場合、まず学校として、問題の箇所を確認し、その箇所を印刷・保存するとともに、いじめ対策委員会において対応を協議し、関係児童からの聞き取り等の調査、児童が被害にあった場合のケア等必要な措置を講ずる。
- (2) 書き込みへの対応については、削除要請等、被害にあった児童の意向を尊重するとともに、当該児童・保護者の精神的ケアに努める。また、書き込みの削除や書き込んだ者への対応については、必要に応じて、大阪法務局人権擁護部や所轄警察署等、外部機関と連携して対応する。
- (3) また、情報モラル教育を進めるため、総合的な学習の時間等において、「情報の受け手」として必要な基本的技能の学習や「情報の発信者」として必要な知識・能力を学習する機会を設ける。

## 7 重大事態への対応

### 市教委に重大事態の発生を報告（※市教委から市長等に報告）

①生命、身体又は財産に重大な被害が生じた疑い（児童生徒が自殺を企図した場合等）。

②相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑い。

※児童や保護者からいじめられて重大事態に至ったという申し出があったとき。

#### →市・市教委が重大事態の調査の主体を判断

##### 学校を調査主体とした場合

市・市教委の指導・支援のもと、対応に当たる。

##### 市・市教委が調査主体となる場合

市・市教委の指示のもと、資料の提出など、調査に協力。

## 第5章 その他

この基本方針は、取組の進行状況の確認や、課題解決に至っていないケースの検証等、学期ごとに検討を行い、児童の実態に応じて計画を見直す。